

少 作 隆 子

金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
リハビリテーション科学領域機能障害学講座



平成17年4月に、金沢大学医学系研究科の脳医科学専攻の講座から保健学専攻の講座に移りました。教育の面で言えば、医者を目指す学生に生理学を教える教官から、理学療法士や作業療法士を目指す学生に生理学を教える教官に変わりました。しかし、研究に関しては、これまでの研究（シナプス伝達の調節機構）を続けていくつもりです。

高校1年の時、生きているとはどういうことか、を生徒に考えさせるユニークな生物の授業に惹かれ、将来は生物の先生か生物の研究者になりたい、と思いました。大学を卒業する時に、さてどちらにしようかと迷いましたが、当時は学校の先生になる方がやさしかったことから、まず研究者を目指し途中で挫折したらその時は先生になろう、と安易な気持ちで生物の研究者を目指す道に進みました。そして、幸運にも途中で挫折することもなく今日まで来てしまいました。ふと気づいてみると、生物学と生理学の違いはあるものの、また、高校と大学の違いはあるものの、先生でありかつ研究者でもある今の自分は、当時の夢を二つとも手にしています。驚きです。それにしても、教育と研究、どちらも自ら望んだことなのに、今は研究が楽しくて、つい教育を重荷に感じてしまいがちです。人間（私？）の欲望はきりが無い、とつくづく思います。

振り返ってみると、これまでたくさんの人に出会い多くのことを学んできました。京都大学で大学院生として膜電位測定法について研究していた時には、私の指導教官であった岡田泰伸講師（現在は生理研の教授）から、公平・平等の精神を学

びました。岡田先生は大学紛争の時には教授をつるし上げていたようで、何事も平等に、がモットーでした。当時岡田先生が指導していた大学院生は3人いたのですが、洗い物当番（細胞培養で使用するガラスの培養ボトルなど大量のガラス器具を洗う当番）を学生に押し付ける、なんてことは岡田先生の主義に反することで、いつも4人（学生+岡田先生）で均等に回していました。大学院生を指導する立場となった今、それが如何に努力を要することであるかがわかるようになりました。つつい学生に仕事を押し付けてしまいがちになりますが、それでも岡田先生のことを思い出し、何とか細胞培養当番だけは大学院生と均等に負担するように心がけています。大阪医科大学で腎尿細管のイオンチャネルの研究をしていた時には、博識な藤本守教授がコーヒーを飲みながらいろいろな分野のこと（日本の歴史、音楽、などなど）を熱く語り、専門分野以外のことにも目を向けよ、と教えられました。金沢大学でシナプス伝達の研究をしていた時には、月曜日から土曜日まで毎日実験を欠かさなかった山本長三郎教授から、コツコツと地道に研究することの大切さを学びました。その後、山本先生の後任として赴任してこられた狩野方伸教授の下で助教授として7年間過ごしました。狩野教授はとても温厚な性格で他大学の研究者とも仲がよく、お互いに協力し合っレベルの高い研究をしています。私も狩野教授のおかげで共同研究に参加することができ、専門分野の異なる研究者が協力し合うことのすばらしさを実感しました。また、お金の心配もなく充実した研究設備でのびのびと研究することがで

き、狩野先生には本当に感謝しています。

その恵まれた研究環境から離れ、自立する時が来てしまいました。自分の実力がどの程度か、試されることとなります。これまでの研究を地道に続け、その中で思いがけない発見にめぐり合うことができればいいな、と期待と不安の入り混じった気持ちでいます。また、これまで多くの人から受けてきた恩を若い世代にお返しできれば、と願っています。

略歴

1979年 金沢大学理学部生物学科卒業

1981年 大阪大学医科学修士課程修了
1985年 京都大学医学研究科博士課程修了，博士号取得，助手（第二生理）
1985年 ドイツ・マックスプランク研究所 研究員
1987年 大阪医科大学助手（第二生理）
1991年 金沢大学医学部助手（第二生理），講師（1994），助教授（1996）
2005年 金沢大学医学系研究科保健学専攻 教授